未来のための手術

一宮南部小・6年・佐久間　我功

ぼくは、六月に足の手術をしました。小さいころから左右の足の長さが一・五センチメートルくらいちがうので、半年に一度は病院へ行っていました。病院では、身体測定やレントゲンを使った検査をして、先生と話をします。

ある日、いつものように先生の話を聞きに行くと、

「六年生の夏休みごろに、足の骨に金具を入れて、長い方の足の成長をゆっくりにする手術をした方がいいですね。」

と、先生がおっしゃいました。どんな手術をするんだろう。どのくらい入院するんだろう。サッカーはすぐできるようになるのかな。歩けるのかな。ぼくの頭の中はぐるぐるとたくさんのなぞがうかんできました。

家に帰ってから、お父さん、お母さんと話をしました。ぼくはあまりこわいとは思いませんでした。こわいというよりも、心配の方が大きかったと思います。いちばん心配だったのは、本当に元通りに歩けるようになるのかということでした。足の長さがちがうことは分かっていたけれど、今まで歩くことも走ることもふつうにできていました。手術をすると今のように走ったりサッカーをしたりできなくなるんじゃないか。ぼくは心配になりました。そんな思いを変えてくれたのは、お父さんとお母さんの言葉でした。

「我功の人生はまだこれからだし、サッカーもできるからだいじょうぶ。我功ががんばればサッカー選手にだってなれる。」

ぼくは、手術後どうなるか分からないし、心配だけど、リハビリやストレッチをがんばって今以上に努力して、サッカーを上達させたい、そんなぼくをお父さんやお母さんに見せたい、そう思いました。

入院の日がやってきました。ぼくは、一週間分の着がえや荷物を持って、お母さんといっしょに大府市にある病院に行きました。手術する覚ごはできていたので、このときこわいという気持ちはあまりなかったです。でも、ぼくは病院に入院するのが初めてだったので、とても不安でした。

ぼくの部屋は四人部屋でした。仕切られたカーテンのおくから、赤ちゃんの声が聞こえてきました。ぼくよりずっと小さい子が、病気やけがで入院しているようでした。自分もがんばらないと。

荷物を部屋に置くとすぐに、明日にひかえた手術の説明を聞きに行きました。朝、シャワーを浴びたら、手術の服に着がえること。先生が手術をする方の足に油性ペンで印をつけること。朝から何も食べてはいけないこと。手術の前にねむたくなる薬を飲むこと。手術はねむっている間に全て終わること。手術の後、痛かったら、がまんせずに看護師さんに言えば薬をもらえること。たくさんのことを聞きましたが、不思議と落ち着いていました。

今度は手術室を見に行きました。

「あの緑のドアの部屋で手術をするよ。」

そう言われ、手術室のおくまでぐるりと見わたしたとたん、ぼくは急にこわくなりました。ここがぼくが手術される場所なんだ、と

目で見て分かった時、心臓がバクバクと鳴り出しました。手術はこわくないしだいじょうぶだと思っていたけれど、本当に明日手術をするんだと急に実感がわいたような気がしました。

その後、リハビリ室で松葉づえの使い方を教わりました。手術後は金具を入れて、右のひざが曲がりにくくなるため、しばらくは松葉づえ生活です。松葉づえを使うことはなかなかないので、ちょっぴりうれしかったです。

あっという間に時間が過ぎて、消灯になりました。布団をかぶりねようとすると、えんえんと泣く赤ちゃんの声、ピーピーとなる機械の音、コツコツとひびく足音、いろいろな音が聞こえてきました。音が気になり、なかなかねむれず、明日の手術のことが頭の中をぐるぐる回っていました。

いつの間にかねむりにつき、目が覚めると、そうだ、今日は手術の日だ。すぐに思い出しました。

手術を待つ時間が遠く長く感じました。お母さんがずっといっしょにいてくれて、いつも通りに話をしたり、じょうだんを言い合ったりしました。お父さんも来てくれて、

「手術がんばって。」

とはげましてくれました。

「もうすぐ手術だから、薬を飲みましょうね。」

看護師さんがぼくにクリーム色の薬を二じょうくれました。手術のきん張をほぐして、うとうとする薬だと説明してくれました。

飲み慣れないつぶの薬を飲むことも心配でしたが、何よりこれを飲んだらずっとねむってしまい、目が覚めないかもしれないという不安がありました。でもぼくは変なプライドがあって、お父さんとお母さんにこわがっていると思われたくなかったし、絶対に泣きたくなかったので、平気な顔をしていました。薬といっしょにこわい気持ちも飲みこんでやりました。

「手術室に今から行きますね。」

薬のせいでだんだんうとうとしてきたぼくは、ベッドに横たわったまま手術室へ移動しました。

「がんばって行ってきてね。」

お父さんとお母さんに見送られて、昨日見た緑色のドアが見えたところまでは覚えていますが、中に入ってからの記憶はありません。意識がだんだんと遠のきました。

手術が終わって目が覚めると、うでに点てきが打たれ、右ひざに包帯が巻かれていました。

「生きてる。」

ぼくはほっとしました。

次の日、点てきが外れて、松葉づえでの移動が始まりました。トイレやシャワーに行くにも足が痛いし、右ひざが曲がらない中で松葉づえを使って歩くことはとてもこわかったです。練習をしていたぼくでさえ難しくてこわいのだから、とつ然けがをした人はもっと大変なんだなと思いました。

慣れない入院や初めての手術、大変な松葉づえ生活は、ぼくにいつも通りの生活や自由に動けるありがたさ、足の大切さなどたくさんのことを教えてくれました。足の治りょうはまだまだ続くけど、

「我功の人生はこれからだ。」

支えになったこの言葉を忘れず、どんなことにもチャレンジしてかべを乗りこえ、サッカー選手の夢をかなえたいです。　5・9